

〔研究紹介〕

国境社会における領域境界と民族境界：
タイ・マレーシア国境東部を生きる中国系住民の視点から

高村 加珠恵（東京外国語大学大学院）

問題の所在と研究の視角

筆者の主な関心は、国境社会が経験する国民国家の影響、なかでも領域境界および民族境界に関する人類学的研究にある。博士論文ではタイ・マレーシア国境東部の国境社会に焦点を当て、人口的にはマイノリティでありながらも、インフォーマルな国境経済の形成において中心的な役割を果たしてきた中国系住民の日常的越境活動から、国境社会の日常の場における領域境界と民族境界のあり方について考察している。

一般的に国境を研究対象とする場合、二つの境界、つまり領域境界と民族境界が問題視される。特定の集団や社会をその主な研究対象としてきた人類学にとって、国境地域は必ずしも不慣れな空間ではない。特に東南アジアをフィールドとする人類学者にとって、国境は少数民族の居住する重要な研究対象地域であった。国民国家が人々の日常の中で重要な意味を持つようになった 20 世紀後半においては、人類学者は、ますます国家との関わりから現地社会を語ることを迫られるようになった。このような中で人類学の関心は主に国境社会における民族境界にあった。特にバルト(Barth 1969)の研究は、従来の認識である「文化を共有する集団」というよりもむしろ、「組織」としての民族に着目し、いかに集団間の民族境界が維持されるのかというメカニズムについて考察している。そこでは民族境界を本質的なものとして認識するのではなく、むしろ構築され人為的に維持される境界であると指摘しており、人類学における民族境界の認識そのものに重要な影響を与えた。東南アジア大陸北部と中国南部雲南との国境地域においては、境界線を越えて居住する少数民族についての研究が多角的な視角から行われており、こうした研究では国家による民族定義の問題、および少数民族の社会的、法的な周縁性の問題が議論の中心となっている(Evans, Hutton and Kuah eds. 2000)。

一方の国境における領域境界は、むしろ政治学、地理学および歴史学が関心とするテーマであり、しばしば国家の形成というマクロな視座から考察が行われてきた。このため領域境界を対象とする国境研究においては「線」としての側面に焦点が置かれ、「面」的側面、その空間性や日常性への視角は欠落している。こうして従来の国境研究においては、いかに国家が国境を管理するかという点は明ら

かにされても、いかに国境社会が国家と関わるかというローカルな視角は明らかにされてこなかったのである(Van Schendel 2005)。一方でドナンらが指摘するように人類学においては、集団の文化・象徴的境界線、つまり民族境界を中心に調査が行われ、国境における領域境界の問題が外されてきた(Donnan and Wilson 1994)。つまり、国境研究において、民族境界を扱う人類学と、領域境界を扱う政治学、地理学というある種の役割分担が成立してきた。本研究は、こうした二つの境界性をめぐる議論のニッチを埋めるような位置にあると言えよう。

研究対象としてのタイ・マレーシア国境東部と中国系住民

本研究の調査地であるタイ・マレーシア国境東部は、人口構成ではマレームスリム住民が8割から9割を占め、特にクランタン側においては非ムスリム人口である中国系住民とタイ系住民は計5%にも満たないマイノリティである。経済的な側面から言えば、クランタンは、隣接するタイ側のナラティワート県同様、最も貧しい州の一つに数えられている。この背景には稲作、漁業、ゴムなど第一次産業が経済の中心にあり、戦後のクランタンにおいては積極的な工業化が行われてこなかったことが挙げられる。また、宗教的にクランタンはマレーシアにおいて最も保守的なムスリム社会であると認識されながらも、同時に古くからタイ仏教徒のコミュニティが北東部の沿海地域に存在し、最も仏教寺院の多い州でもある。これはまさにこの空間がマレーイスラーム圏とタイ仏教圏のはざまに位置していることを示すものである。近年の人類学者の関心もまた、この二つの民族境界の関係性に焦点が置かれ、南タイ側では仏教を基盤とする国民国家タイにおけるムスリム住民の周縁性、北マレーシア側ではマジョリティのマレームスリム環境におけるタイ仏教徒の周縁性にある。

一方の中国系住民の場合、国境を隔てて異なる民族集団に分類され、戦後の国民教育のプロセスにおいて異なるアイデンティティが形成された。マレーシア側においては *Melayu, Cina, India* という明確な民族境界に基づく集団から構成される社会を前提に国民国家建設が行われたことにより、*Cina* という公的な民族カテゴリーの中で「華人」という「我々意識」は保証され、維持されてきた。しかしながら一方のタイにおいては、「タイ」という単一の国民性を基盤とする国民国家形成の中で、「タイでないもの」が排除された。「タイでないもの」の代表である *Khonjin* (中国人) はその国民のカテゴリーから排除され、中国系住民は「タイ」という範疇にある種暴力的に組み込まれていったのである。こうして中国系住民は同じ移民背景を持つにも関わらず、戦後において国境を境に全く異なる民族カテゴリーおよびそれに基づくアイデンティティが形成された。従来のクランタンにおける中国系住民に関する研究では、町の華人(*Cina Bandar*)と村の華人

(*Cina Kampong*)に区別し、人類学者や言語学者を中心に特に農村に住むクランタン特有の華人に関して調査が行われている(Winzeler 1985)。しかしながらこうした先行研究においては国境を越えた華人のつながりはほとんど明らかにされていない。

研究課題およびアプローチ

博士論文では、国境社会が経験する領域境界と民族境界について、歴史的視座も含めた人類学的考察を行っている。主に中国系世帯におけるその移民背景、商業活動、および日常的越境に関する参与観察および聞き取り調査を行っただけでなく、クランタン英アドバイザー資料などのアーカイブ資料を中心に国境形成のプロセスを国境画定时にさかのぼって考察している。以下はその主な研究課題およびそのアプローチである。

第一に国境社会の歴史的背景を理解するために、大きな枠組みとしてのマレー半島東海岸における近代の経済的経験について明らかにする。マレー半島東海岸はバンコク中心の米経済圏およびシンガポール中心の錫・ゴム経済圏のちょうど中間地点に位置しており、必ずしも広域的な植民地システムから孤立した存在ではなかった。特にクランタンの国際港トゥンパットを中心に構築されていた南タイ国境地域を含めた地域物流システムについて英領事報告、英アドバイザー資料、年次報告などを用いながら明らかにする。このような歴史的視座は、東海岸の経済的位置を再検討するだけでなく、この地域経済形成において中心的な役割を果たしていた華人の姿にも関わる。つまり従来のバンコク中心のタイ華人、および西海岸中心のマレーシア華人研究では、ほとんど明らかにされてこなかったマレー半島東海岸における華人の移民背景である。

第二に、戦後期におけるタイ・マレーシア国境東部経済の形成についてである。この国境経済の形成の背景には、1948年の戒厳令によって国境地域における鉄道網の再編成が行われ、20世紀前半に機能していたトゥンパット港を中心とする物流システムが崩壊したことが挙げられる。これはクランタン北東部と南タイの間の鉄道網を分断し、代わりに東海岸経由でクランタンとマレー半島西海岸を結ぶものであった。こうして従来のトゥンパット港に代わり、南タイ側の国境であるゴロックが地域物流網の拠点として台頭した。この物流網の再編成によるゴロックの台頭は、1950年代初頭における強力なゴム経済を基盤とする。興味深いことに、ゴロックと隣接するマレーシア側の国境では、タイ側とは全く異なるインフォーマルなモノの流れを基盤とする経済が形成された。戦後期における国境経済形成の背景について、この地域においてパイオニア的存在であった華商の経済活動を中心に明らかにする。

第三に、インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズムについてである。筆

者の研究対象であるタイ・マレーシア国境東部の最大の特徴は、国家の出入国の統計に含まれないインフォーマルな日常的越境者の圧倒的な多さである。このようなインフォーマルな越境が日常化する背景には、国境における国家権力の弱さがあるとは必ずしも言えない。マレーシア側の国境に目をやれば、近代的な移民局、税関、国境警備隊という国家装置がしっかりと存在する。ここで注目したいことは、こうした国境に配備された管理装置とインフォーマルな越境者との日常的な関わりであり、なぜ国境における国家の存在にも関わらず、インフォーマルな越境が許されているのか、である。本研究ではインフォーマルな人やモノ越境が日常化する背景には、無秩序があるのではなく、むしろ越境者および国家の間にある種の暗黙のルールが存在していると認識する。この空間のメカニズムを明らかにするために、越境者による法的地位の確保、国家による選択的越境管理、国境空間における多重的国境管理という側面に焦点を当てる。

第四に、国境社会が経験する領域境界および民族境界について、教育現場から考察を行う。具体的にはマレーシア側国境の華文小学校に焦点を当て、越境通学者の法的地位と日常的越境行為との関連性、および学校という場における民族境界の問題を考える。そもそもこの華文小学校は、1950年代半ばに南タイ側の華人からの要望によって設立されたという経緯を持つ。タイ側で華語教育を受けることのできない華人のための母語教育を目的の一つとするものであった。しかしながら、1950年代末以降、マレーシア政府による越境通学者の法的地位に対する介入が強まり、マレーシア国籍を持たない子供たちの越境が事実上不可能となった。現代のこの華文小学校は、華語を母語としないマレー学生が7割以上を占め、かつての母語教育の姿よりもむしろ経済的価値の高い言語としての華語の姿がある。しかも現在の越境通学者たちは、マレーシア側の国籍を保有する二重国籍者であるものの、公式の書類上ではすべてマレーシア内に現住所を持つマレーシア国民であるため、学校側も明確に越境学生の数を把握できていない。越境通学生のあり方を設立時にさかのぼって考察することにより、いかに法的地位の確保がインフォーマルな日常的越境において重要な条件となっているのかを考察する。また、マレームスリム環境の中の華文小学校において、華人性とマレー性という民族境界だけでなく、華人にカテゴリー化されるタイとの通婚の子供たちの華人性とタイ性というあいまいな境界線を考察する。

最後に現代の国境社会における領域境界をめぐる新しい展開について、具体的には近年の免税区化のもたらす国境社会への影響という事例から考察を行い、インフォーマルなモノの流れを基盤とする国境経済の直面する問題およびその将来性を考える。これはアセアン地域内経済統合という現代的文脈の下で、領域境界は強まるのか、それとも弱まるのかという大きな問題とも関わる。

従来の研究においてマレー半島東海岸地域は、固定化されたイメージ、つまり保守

的なマレー農村社会という要素が強く、クランタン社会の特有性が強調され、その国境を越えたつながりに関してはほとんど明らかにされてこなかった。しかしながら、国境空間を日常的、ローカルな視角から眺める場合、インフォーマルな人やモノの越境が日常化される国境空間の姿が浮き彫りとなる。特定の国境社会における特定の民族集団の越境活動に焦点を絞るというアプローチは、日常生活の場における領域境界と民族境界という二つの境界性の密接な関係性を浮き彫りにすることを可能にし、東南アジアにおける国境空間へのアプローチにおいて新たな視座を提示することができるのではないかと考えている。

参考文献

- Barth, Fredrik (ed.) 1969. *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*. London: George Allen & Unwin.
- Donnan, Hastings & Thomas Wilson (eds.) 1994. *Border Approaches: Anthropological Perspectives on Frontiers*. Lanham, NY and London: University Press of America.
- Evans, Grant, Christopher Hutton, & Kuah Khun Eng (eds.) 2000. *Where China meets Southeast Asia: Social & Cultural Change in the Border Regions*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Van Schendel, Willem and Itty Abraham (eds.) 2005. *Illicit Flows and Criminal Things: States, Borders, and the Other side of Globalization*. Bloomington: Indiana University Press
- Winzeler, Robert.1985. *Ethnic Relations in Kelantan, A Study of the Chinese and Thai as Ethnic Minorities in a Malay State*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.